

冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究

井村 仁*

Effects of Adventure Program upon Self-Enhancement

Hitoshi IMURA

The purpose of this study was to review 24 doctoral dissertations, published from 1980 to 1985, particularly, on the effects of adventure programs upon the participants' self-concept and Locus of Control, and to investigate recent research trends in terms of research design, independent and dependent variable, and subject.

The following results were obtained.

1. 60 % of research reviewed indicated positive effects of adventure programs upon self-concept and Locus of Control.
2. The majority of research employed experimental design and quality of research on this topic was improved.
3. Research had a tendency to increase Locus of Control as dependent variable in addition to self-concept.
4. Half of research was for special population such as juvenile delinquent, problem youth.

* 国際武道大学 (International Budo University)

アメリカにおいて、冒険プログラムが始められたのは、1962年にOutward Bound School (OBS) がコロラドに設立されたことを契機としている。これ以降、野外教育の場はもちろん、広く野外レクリエーションとして急速に広まって行った。Dunn & Gulbis (1976) はこのような現象を”Risk Revolution”と名づけている。Hammerman (1980) は、アメリカの最近にいたるまでの野外教育の50年の歴史を分析したなかで、1970年代の1つの特徴として Adventure Education を挙げている。多くの野外教育関係機関はもちろん、様々な教育機関、治療機関において、OBSの哲学を基に色々な冒険プログラムが展開されてきている。最近の野外教育施設では、チャレンジコースやロープスコース、イニシヤティブコースなどと呼ばれるアドベンチャー的要素を備えたコースや、仲間の協力を要求されるようなコースを、その施設として保有するところが多くなってきている。²⁰⁾

一方わが国においても、国民の野外活動志向とあいまって様々な”Risk Recreation”や冒険教育活動が展開されてきている。しかしながら、このような現象に反し、わが国の冒険プログラムに関する研究は非常に遅れており、冒険プログラムの概念、管理、指導法、効果などについての研究の必要性が高まってきている。

本研究の目的は、アメリカで発表された博士論文を吟味することにより、今後ますます需要の高まってくであろうと予測される冒険プログラム研究の視点を明らかにし、冒険プログラムの健全な発展の一資料とすることにある。

上記の目的を達成するため、1980～85年の5年間に発表された冒険プログラムに関する博士論文45編のうち、特に自己の発達について実証的研究を行なった24編について研究の概要を紹介し、そして1) 研究計画、2) 変数(プログラム、検査用具)、3) 被験者の観点から研究の動向を検討する。

1980～1985年の博士論文を取り上げた理由は、次の通りである。①.1970年代後半に冒険プログラムに関する研究レビューが数編出され、そこでいくつかの問題点が指摘された。このような70年代までの弱点を補うことができる様々な研究がなされていると考えられること。②.最新の研究論文から、今後の冒険プログラム研究の方向性についても検討できること。③.研究の質について保障されていること。

1. 理論的背景

現在、アメリカにおいて、冒険プログラムの定義は必ずしも統一されている訳ではない。冒険プログラムの教育的効果についてレビューしたIida (1976) は、”Outward Bound”、”Modified Outward Bound”、”Survival Training”、”Survival Camping”、”Camping Adventure”、”Wilderness Adventure”、”Outdoor Challenge”等を総称して”Adventure Oriented Program”とし、「自然環境の中で行なわれるストレス的経験に基づく教育的活動」と定義している。

またMetcalf (1976) は、Survival Trainingとはほぼ同義のものとして”Adventure Education”という用語を用いている。Mortlock (1978) は、彼の著書である”Adventure Education”の中で、次のように定義している。

「Adventure Educationは、野外教育の持つ重要な一面であり、危険性を内在した種々の野外活動を利用するものである。Adventure Educationは、安全という枠の中で、参加者に意味のある挑戦を提供し、彼らに個人的・社会的な深い認識をもたらす。この様な状況で成功するには、身体的な面と精神的・情緒的な面とが相互に依存しながら合う必要がある。これから出会う様々な問題を解決する術として各個人の能力にあった技術が指導される。」(p.40)

このように冒険プログラムは、参加者にとって強いストレスを与える冒険的な行為を通して、自己の発達、人間関係の理解、環境の認識、野外生活技術の上達等を図る生涯教育活動と解釈することができる。

一般に自己概念(自己意識)は、その人の行動を規定する内的準拠枠と言われ、人が自分自身をどのようにとらえているかによって、その人の行動様式が決定されてくる。特に、人が日常生活の中で次々に取り組んできた課題をどの程度成功裏に達成してきたかという成功・失敗経験と、その課題達成を通じてどの程度周囲の人から評価され承認されてきたかという承認・否認経験の積み重ねによって自己が発達してくる。²¹⁾

冒険プログラムでは、いかに困難で危険な課題であっても、個人の能力を出し合い、協力し合うことで、克服し成功できるという実体験を繰り返し行な

うことにより、自己の発達を図っている。

2. 研究論文の概要

今回取り上げた24の博士論文を概観してみると、独立変数としての冒険プログラムの内容が多岐にわたっており、プログラムの多様性が特徴として挙げられる。ここでは、これらのプログラムをOutward Bound School、National Outdoor Leadership School、Modified Outward Bound、Project Adventureの4つに分類し、各々の研究の概要を述べることにする。

1) Outward Bound School (OBS)

OBSの哲学と方法は冒険プログラムの基盤となっており、70年代の研究の多くがOBSに集中していた。80年以降5年間にOBS Programを扱った博士論文は10編報告されているが、自己の発達に関する実証的研究は2編であった。Huie (1982) はノースカロライナOBSの90日間コースに参加した13名を対象にLevenson's Locus of Control Surveyを実施した結果、Powerful Othersに有意な向上がみられたが、他の項目にはみられなかった。

また、Thomas (1985) はミネソタOBSのジュニアコース参加者に対して、Tennessee Self Concept Scale (TSCS) を用いて自己概念の変化を調べたところ、統制群との間に差はみられず、またコース期間(14日 vs 21日)による差もみられなかったと報告している。

2) National Outdoor Leadership School (NOLS)

OBSから派生し、特に指導者養成を目的として設立されたNOLSに関する研究が2編みられた。Bridgewater (1981) は95日間コースに参加した37名にI-E Scaleを用いて測定したが差はみられなかった。一方、355名の参加者の自己概念の変化をTSCSを用いておこなったEasley (1985) の研究では、統制群との間に10の下位尺度のうち7尺度で向上がみられた。

3) Modified Outward Bound

OBSの哲学に基づいて独自に開発されたプログ

ラムは、一般に修正プログラム (Modified Program) と呼ばれ、合計16編の研究があり、そのうち、10編は非行や問題児、障害児に対する治療矯正を目的としたプログラム (Adapted or Therapeutic Program) であった。

6日間のUpward Bound参加者を対象にしたSalter (1982) とMartin (1983) の研究では、共にTSCSを用いており、参加者の自己概念が向上したことを報告している。10組20人の夫婦に対してTSCSを実施したMason (1980) の研究においても同様の結果が得られた。一方、Chesnutt (1980)、Doyle (1981)、Ewert (1982) の研究においては、自己概念の向上が認められなかった。Ewertによれば、9日間と23日間の期間の差も自己概念の向上に影響がなかった。

非行少年に対するOBSの効果について行なわれたKelly & Baer (1968) の研究以来、多くの治療矯正プログラムが展開され、研究されている。非行に関してはPlouffe (1981)、Wright (1982)、Weeks (1985) の研究があり、いずれも自己概念が向上し、Locus of Control (LOC) がよりInternalになることが結果として認められた。

問題児を対象に研究をおこなったGibson (1981) やGaar (1981)、Marshall-Liebling (1985)、Nurenberg (1985) らの結果も、自己概念やLOCに向上がみられたことを報告している。しかし、Nunley (1983) の研究では、自己概念とLOCのいずれにも向上は認められなかった。

そのほかに、薬物の常用者を扱ったWilliams (1984) と聴覚障害者を対象にしたLuckner (1983) の研究があるが、自己概念とLOCの向上に効果をあげている。

4) Project Adventure

OBSのプログラムを学校教育に導入する目的で始められたのがProject Adventureで、通常体育授業の一環として校庭や体育館を使った冒険的活動がその内容となっている。TSCSを用いて43名の男女中・高校生を対象に行なったQuimby (1982) の研究では自己概念に向上が認められたが、小学生を扱ったDanziger (1982) やDeery (1983) ではそれぞれ自己概念とLOCの向上に差がみられなかった。また、小学生の学習遅滞児に

対する Duhaime (1982) の結果でも自己概念と LOC の両方に効果は認められなかった。

冒険プログラムが自己の発達に与える効果について 70 年代の中葉までの成果をレビューした Harris (1975) は、研究のほぼ 70% が自己の向上に効果があった、と述べている。80~85 年の研究の結果は、24 編中 15 編 (62.5%) に自己の向上がみられほぼ同様の結果を示した。しかしながら、治療矯正プログラムと Project Adventure を除いた結果では、向上がみられた研究は 10 編中 5 編 (50%) であった。70 年代の研究に比べて、80 年代の研究では統制群を持ったより厳密な研究計画が多くなった事が影響しているものと思われる。それとは反対に、治療矯正プログラムでは、11 編中 81.8% に自己概念及び LOC の向上が認められ、この分野における効果が顕著であった。

3. 研究の動向

1) 実験計画について

Iida (1976)、Shore (1977)、Cousineau (1978)、赤井 (1978)、井村 (1978)、Ewert (1983) が指摘しているように、冒険プログラムに関する初期の実験、準実験研究では統制群を持たない研究 (One Group Pretest - Posttest Design) が多く、たくさんの弱点がみられその成果の信頼度が低かったが、今回の論文では 3/4 が統制群を持った実験計画であった。

Chesnutt (1980)、Doyle (1981)、Duhaime (1982) の研究では、それぞれ統制群を 2 群ずつ設け、より精度の高い方法を用いた。また、Pretest - Posttest Control Group Design の欠点である "Interaction of testing and X (単にプログラム体験が及ぼす影響の他に、Pretest を実施することにより、Pretest の内容が被験者に影響を及ぼしてしまうこと。この傾向は特に態度変容などについてよく見られる。)" を補う計画である "Solomon Four Group Design" を採用した Danzinger (1982) と "Posttest Only Control Group Design" を採用した Williams (1984) の 2 論文が目目される。これらの 2 つの方法は、実験計画法の中でも最も信頼度の高い方法とされている。

"Solomon Four Group Design" は、ランダ

ムに選んだ実験群と統制群をそれぞれ 2 つのサブグループに分け、実験を行なう。この方法によれば、実験以外の要因を取り除くことができると共に、テストを 2 度行なう場合の 1 回目のテストが 2 回目のテストに及ぼす影響も排除することができる。また、実験の効果について 4 度にわたって検証することができる等、利点が多い。また、"Posttest Only Control Group Design" は、非常にシンプルな方法であるが、Solomon と同様な理由で、信頼度の高い技法と言われている。この様にして統制群を扱う研究を行なう場合、無作為配置の原則や外的妥当性について充分配慮する必要がある。³⁾

また、統制群をもたない研究計画においても工夫がみられた。Huie (1982) は、"2 pretest and posttest Design" により実験期間 (90 日) と同じ期間を事前にとり被験者の時間経過による変化を検討できるようにした。

Quimby (1982)、Danzinger (1982)、Duhaime (1982) らの研究では、Project Adventure 形式の体育授業のように、週に何回か実施し、それを数週間にわたって繰り返す冒険プログラムの効果を Pre - Posttest Design で検討しているが、冒険プログラム以外の影響、例えば日常生活での様々な体験が自己概念に影響を及ぼすのであるから、そのような点を配慮した実験計画が必要であろう。

2) 変数について

独立変数について言えることは、その冒険プログラムの期間が 3 日から 110 日まで非常に幅広く、また、そのプログラム内容も多彩であるということである。プログラムの期間の差は、その効果に影響を及ぼさないと Thomas (1985) や Ewert (1982) は報告している。冒険プログラムは単にストレス的な経験を行なうのではなく、野外生活を基盤にして構成されたものであるから、今後 Shore (1977) が指摘しているように、プログラムの活動内容や指導方法について検討を行なうと共に、どのようにストレス的経験をコントロールするかについても充分吟味する必要がある。

従属変数については、依然として自己概念に関する研究が中心となっているが、Locus of

Controlを取り扱う研究が最近増えてきている。24編中11編(45.8%)がLocus of Controlを従属変数としていた。人の行動を予測する上で重要な人格変数であるLocus of Controlでは、一般に強化を自分の行動や特性に随伴したものとみなし、環境に対する統制可能感をいだいているInternalsは、そうでないExternalsよりも、目標達成に向かってより大きな努力を行使し、その結果、より卓越した成果をあげることが期待されると考えられている。¹⁹⁾例えば、冒険プログラムを経験していく中で、成功経験を繰り返していくと、最初は外的な”運”で成功できたと考えていたことが、しだいに自分自身の行動の結果として、成功を導いたのだと考えられるようになる。このような意味で、最近の冒険プログラムの効果を検討する研究の変数として、Locus of Controlが用いられるようになったものと考えられる。

しかしながら、従属変数を測定するための用具が、依然としてそのほとんどが標準テストである。1つの変数に対し複数の用具で検証を試みている研究もあるが、冒険プログラムのような特殊な状況に参加する特定の対象者の変化や変容を評価するためには問題がある。

3) 被験者について

今回扱った論文では、全体の約5割が非行少年、問題児などいわゆるSpecial populationを対象としていた。何故、冒険プログラムが様々な治療効果をもたらすかについては明確ではないが、一般的に非行少年や問題児は、自己の発達に未熟で、現実と理想自己との差異が極端に大きいとされていて、これが問題行動に関係があるといわれている。

冒険プログラムでは、成功経験の積み重ねにより、自己を向上させ、この差異を次第に減少させていくことができる。また、自然環境の中では、色々なストレスを受ける日常生活と異なり、自分の力でストレスをコントロールすることができると共に、質のよいストレス(自己の発達を促すようなストレス)を厳選し、享受する事が可能な環境でもある。このような点から、今後治療プログラムの可能性について、益々研究が行なわれるであろう。

次に被験者について言えることは、Project Adventureを除くと18才~20才代前半の年齢層が対象となっており、小・中学生を対象とした、宿泊をとまなう冒険プログラムについて検討した論文が見あたらないことが指摘される。わが国では井村(1985)、飯田ら(1987)が小・中学生を対象に研究を行っており、今後ますます増加するであろうと推測される高齢者のための冒険プログラムと共に、¹⁹⁾ 広範囲にわたる年齢層を対象とした研究が必要になるであろう。

結 論

本研究の目的は、アメリカで発表された冒険プログラムに関する博士論文を吟味することにより、今後益々需要が高まるであろう冒険プログラムを研究していく上での基礎資料を得ることであった。そこで1980年から1985年の5年間で発表された自己の発達に関する24の実証的研究論文を吟味した結果、次のようなことが明らかになった。

1. 吟味した論文の約60%が、自己の発達に冒険プログラムが有効であることを示している。特に治療矯正プログラムではその割合が約80%である。
2. 実験計画に関しては、統制群をもった研究が約75%を占め、新しい試みと精度の向上への努力がみられ、研究の質が高度になっている。
3. 自己の発達をとらえるのにLocus of Controlの理論を適用した論文が増えている。
4. 冒険プログラムの期間や活動内容に多様化がみられる。
5. 非行少年や問題児等のいわゆるSpecial populationを扱った論文が全体の45%を占めている。

参 考 文 献

- 1) 赤井利男、飯田稔、「Outward Boundとその心理的効果に関する文献研究」、筑波大学体育科学系紀要、1:45-53、1978.
- 2) Bridgewater, H. G., "The Effect of a Ninety-five Day Wilderness Camping Program upon Personality", Doctoral dissertation, Oklahoma State University, 1981.
- 3) Campbell, D., & Stanley, J., "Experimental and Quasi-experimental Designs for Research" Chicago: Rand McNally, 1966.
- 4) Chesnutt, J.T., "The Effects of a Three Week Adventure-Oriented Program and a Five Week Leadership-experience Program upon the Self-Concepts of Counselors-in-training", Doctoral dissertation, University of Georgia, 1980.
- 5) Cousineau, C., "The Measured Impact of Outdoor Adventure Programmes", Recreation Research Review, 45-51, May 1978.
- 6) Danzinger, A.G., "The Effects of Adventure Activities on the Self-Concept of Elementary School Children", Doctoral dissertation, The Ohio University, 1982.
- 7) Deery, B.E.W., "The Effect of Project Adventure on Sixth Grader's Reading and Math Scores, and Its Relationship to Locus of Control", Doctoral dissertation, Boston College, 1983.
- 8) Doyle, W.E., "An Outdoor-Challenge Experience and the Affective Development of College Students", Doctoral dissertation, The University of Connecticut, 1981.
- 9) Duhaime, D.E., "The Effects of an Outdoor Affective Education Program on the Self-Concept, Social Adjustment, Classroom Behavior and Affective Behavior of Learning Disabled Children", Doctoral dissertation, University of Pennsylvania, 1982.
- 10) Dunn, D.R., & Gulbis, J.M., "The Risk Revolution", Parks and Recreation, 11:12-17, 1976.
- 11) Easley, A.T., "The Personality Traits of Wilderness Leadership Instructors at NOLS: The Relationship to Perceived Instructor Effectiveness and the Development of Self-Concept in Students", Doctoral dissertation, Virginia Polytechnic Institute and State University, 1985.
- 12) Ewert, A., "A Study of the Effects of Participation in an Outward Bound Short Course upon the Reported Self-Concepts of Selected Participants", Doctoral dissertation, University of Oregon, 1982.
- 13) Ewert, A., "Adventure Programming for the Older Adult", JOPERD (March), 64-66, 1983.
- 14) Ewert, A., "Outdoor Adventure and Self-Concept: A Research Analysis", Eugene: College of Human Development and Performance, Department of Recreation and Management, Center of Leisure Studies, University of Oregon, 1983.
- 15) Gaar, L.A., "Interpersonal Interaction in Youth Offenders during a Therapeutic Wilderness Experience: A Social Learning Perspective", Doctoral dissertation, Emory University, 1981.
- 16) Gibson, P.M., "The Effects of, and the Correlation of Success in, a Wilderness Therapy Program for Problem Youth", Doctoral dissertation, Columbia University, 1981.
- 17) Hammerman, W.M.(Ed.), "Fifty Years of Resident Outdoor Education: 1930-1980 Its impact on American Education", American Camping Association, 1980.
- 18) Harris, D.V., "Perceptions of Self", In B.van der Smissen (Ed.), Research Camping and Environmental Education, The Pennsylvania

- State University, Penn State HPER Series 11 : 153-163
- 19) 樋口一辰、清水直治、鎌原雅彦、「Locus of Control に関する文献的研究」、東京工業大学人文論叢、5 : 95-132,1979.
- 20) 星野敏男、「人間教育としての野外教育」、明治大学経営学部人文科学論集、34 : 49-67,1987.
- 21) Huie, J.C., "A Semester Outward Bound Course: An Exploratory Study of Effects on Locus of Control, Value, and Life Meanings", Doctoral dissertation, University of California, 1982.
- 22) Iida, M., "Adventure-Oriented Programmes: A Review of Research", in B. van der Smissen (Ed.), Research in Camping and Environmental Education, The Pennsylvania State University, Penn state HPER Series, 11 : 219-242, 1975.
- 23) 飯田稔、影山義光、「冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念」、第38回日本体育学会発表論文、1987.
- 24) 井村仁、飯田稔、「アメリカにおける Outward Bound School に関する研究 -Doctoral dissertationを中心に」、第8回日本レクリエーション学会発表論文、1978.
- 25) 井村仁、「短期間のアドベンチャー・プログラム経験が小・中学生の自己概念と不安に及ぼす影響」、国際武道大学紀要、1 : 15-25,1985.
- 26) 梶田毅一、「自己意識の心理的機能」、児童心理学の進歩、14 : 221-248,1975.
- 27) Kelly, F. & Baer, D. "Outward Bound : An Alternative to institutionalization for adolescent delinquent boys", Boston, Massachusetts : Fandel Press, 1968.
- 28) Luckner, J. L., "Outdoor-Adventure Education and the Hearing Impaired: An Investigation of the Effects of Self-Concept and Locus of Control", Doctoral dissertation, University of Northern Colorado, 1985.
- 29) Marshall-Liebing, M., "Adolescent Group Counseling and Outdoor Survival Trips: Two School Programs Designed to Modify Character Traits Common to High School Dropouts", Doctoral dissertation, Brigham Young University, 1985.
- 30) Martin, P.B., "The Effect of an Outdoor Adventure Program on Group Cohesion and Change in Self-Concept", Doctoral dissertation, Boston College, 1983.
- 31) Mason, M.J., "Relationship Enrichment : Evaluating the Effects of a Couples Wilderness Program", Doctoral dissertation, University of Minnesota, 1980.
- 32) Metcalfe, J.A., "Adventure Programming", National Educational Laboratory Publishers, Inc., 1976.
- 33) Mortlock, C., "Adventure Education", Old Fisherback, Ambleside, Cumbria, 1978. (ED172994)
- 34) Nunley, G.L., "The Effects of a Therapeutic Outdoor Program on the Locus of Control and Self-Concept of Troubled Youth", Doctoral dissertation, Oklahoma State University, 1983.
- 35) Nurenberg, S. J. G., "Psychological Development of Borderline Adolescents in Wilderness Therapy", Doctoral dissertation, Smith College School for Social Work, 1985.
- 36) Quimby, T.R., "The Effect of Project Adventure on Selected Affective and Psychomotor Outcomes", Doctoral dissertation, Boston University School of Education, 1982.
- 37) Plouffe, M.E.M., "A Longitudinal Analysis of the Personality and Behavioral effects of Participation in the Connecticut Wilderness School: A Program for Delinquent and Pre-delinquent Youth", Doctoral dissertation, The University of Connecticut, 1981.
- 38) Salter, B.R., "The Upward Bound Program and its Impact on Self-Ratings of Personality Characteristics", Doctoral dissertation, Adelphi University, 1982.
- 39) Shore, A., "Outward Bound : A Reference Volume", New York : Topp Litho, 1977.

- 40) Thomas, S.E., "The Effect of Course Length on Self-Concept Changes in Participants of the Minnesota Outward Bound School Junior Program", Doctoral dissertation, State University of New York at Buffalo, 1985.
- 41) Webster, S.E., "Project Adventure : A Trip into the Unknown", Journal of Physical Education and Recreation, 49 (4) :39-41, 1978.
- 42) Williams, T.E., "The Effects of a Brief Adjunctive Physical Challenge Wilderness Program on Locus of Control in Adolescent Substance Abusers", Doctoral dissertation, Oklahoma State University, 1984.
- 43) Weeks, S.Z., "The effects of Sierra II, an Adventure Probation Program, upon Selected Behavioral Variables of Adolescent Juvenile Delinquents", Doctoral dissertation, University of Virginia, 1985.
- 44) Wright, A.N., "Therapeutic Potential of the Outward Bound Process : An Evaluation of a Treatment Program", Doctoral dissertation, The Pennsylvania State University, 1982.